

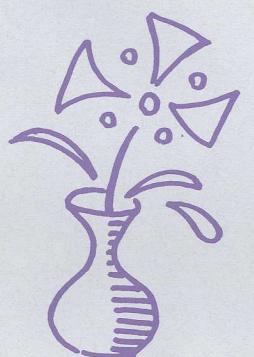
学際交流のはじまり

ノツチングガム大学との国際学術交流のそもそもその始まりは、英國人間工学会会長のE・コレット教授（ノツチングガム大学生産工学科教授）とのつき合いからです。教授は世界的に名の知られた研究者であり、広島大学での集中講義も快く引き受け下さり、大学院学生を相手に「生産システムにおける人間工学的視点」というテーマで、一九八四年九月に集中講義をしていました。だいていますし、日本人間工学会中四国支部大会（一九八六年）でも特別講演を受けていたことなどを含めて三回も広島大学を訪れています。

この関係で、生産工学科との交流は数回にのぼり、学術的な討議を重ねたりして、今日に至っています。一九九一年七月には、大学院学生A・ニーリー君が本人の博士論文のデータ収集のために広島を訪れ、マツダ等の日本企業の調査を行い、それに協力をしました。また、一九九一年度にノツチングガム大学のオブライエン、ウイルソン両教授と「先端的生産システムと計算機による統合化」というテーマで、双方の生産工学科と本学計数管理工学講座との国際的共同研究にトヨタ財団より研究助成を受けて相互に交流してお

今後も続く国際交流

国際交流は協定を結ぶだけでは意味
がありません。相互に往き来て互い
に討議し情報交換することによつて、
双方のもつている学術的な良さを譲り
あわねばなりません。ノッチンガムは
人も良く環境ものどかな所ですし、ロ
ンドンからそれほど遠くもありません。
工学部の教官及び大学院学生諸君も是
非ともノッチンガムに足をのばして、
英國の良さをみていただきたいと思ひ
ます。同時に、ノッチンガム大学側か
らも来広されて、日本や広島の人情に
直接ふれていただきたいし、工学部の
レベルの高い技術に接していくいただきた
いと願つています。

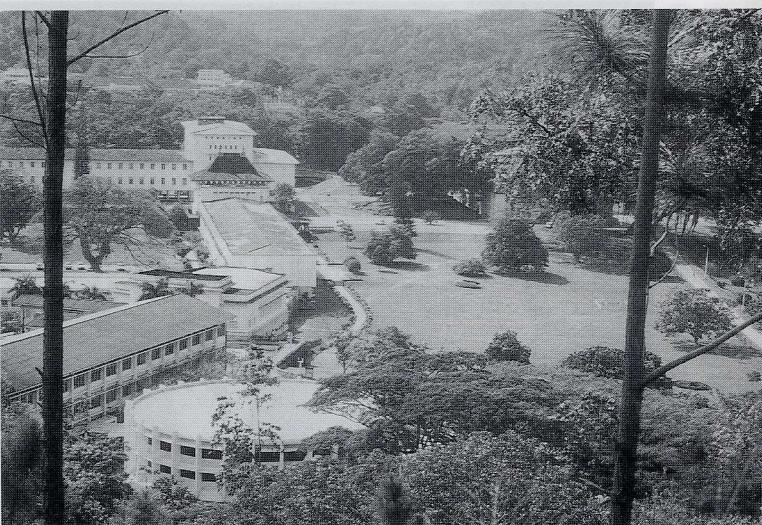


スリランカとの協定第一号

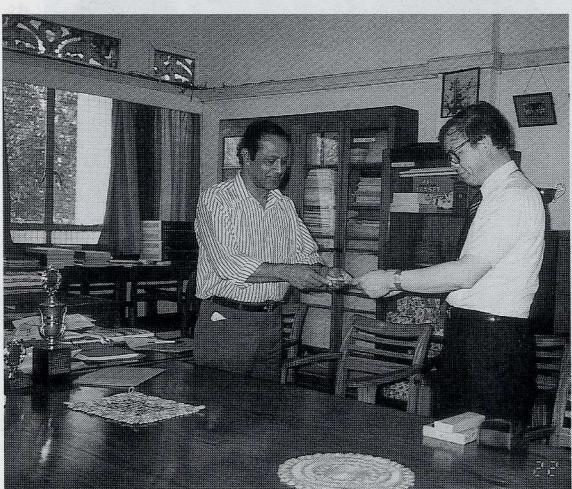
広島大學生物生産学部とスリランカ民主社会主义共和国ペラデニヤ大学農学部との間で、今年三月二十二日、交流事業に関する学部間協定が締結された。広島大学としては二十六番目の協定であるが、広島大学がスリランカの大学と結んだ最初の協定であり、生物生産学部にとつては最初の国際協力協定である。ここではスリランカとペラデニヤ大学を紹介しつつ、今後の展望を述べてみたい。

スリランカ 民主社会主義共和国

一九五六六年までのスリランカの正式国名はセイロンであつた。現在でもセイロン紅茶などと呼ばれているので、セイロンの方が日本人にとつては馴染みが深いかもしない。セイロンの語



▲ペラデニヤ大学のメインキャンパス
12月初旬だが、休暇中で人影は少なかった



▲角田生物生産学部長が署名した協定書をグナセナ農学部長へ手渡す筆者



ペラデニヤ大学農学部動物
科学科教官と協定後の交流
事業について話し合う。
(右端は筆者)

源は、スリランカの国語であるシンハラ語の『獅子の子孫の島』である。日本本の古事記よりも古い史書が現存しているほど古くから文明が栄えた国であり、日本と同じく仏教の盛んな島国であるが、人口と面積は日本の五分の一足らずである。

十六世紀初頭からポルトガル、オランダ、イギリスの侵略を受けたが、一九四八年に独立した。独立後のスリランカは植民地経済を引き継ぎ、社会資本が充実していったため、当時の一人当たりの国民所得や自動車保有台数、死亡率などの指標では日本より上位にあつた。その後、日本は高度成長政策をとり世界有数の経済大国になつたが、スリランカは福祉政策を重視したため、アジアの中でも低い経済成長率に止まつていて。国の経済を支えているのは現在も農業であり、国民総生産の六五%を農業が占める。無償で入院治療や大学教育が受けられるなど、一面で日本と対照的な国である。

生物生産学部 ペラテニヤ大学 農学部と交流協定を結ぶ

生物生産学部 生産基礎学講座
安藤 忠男